

卒業論文

大学生の職業選択における理想と現実的制約

平成 18 年度入学

文学部人文学科人間科学コース

社会学・地域福祉社会学

平成 22 年 1 月提出

## 要約

本論は大学生の職業選択における理想と現実的制約について述べたものである。仕事を選ぶことは社会の中での自分のあり方を決めることでもある。このときの選択によって生活の質も変わってくる。就職活動においては、理想の職業像というものが少なからずあると考えられる。それは会社や職種だけでなく、その仕事に就いたときの働き方や生活も含めて考えられたものだ。そうした理想の職業像を実現できるように就職活動に取り組むのだが、必ずしも成功するとは限らない。就職難と言われるこのごろでは、自分が強く希望する職業に就くことは難しくなっている。そのような状況で、最終的に自分が納得できる職業をどのように見つけるのかということについて検証する。

第一章では、現代の大学生が就職活動を行う状況について述べている。民間企業、官公庁のどちらに就職するとしても数段階の採用試験を乗り越えなければならない。また、2008年のリーマンショックをきっかけとした経営悪化に伴い、採用人数を絞る企業も増えた。このような厳しい環境の中で大学生は就職活動に取り組んでいるのである。

第二章では、先行研究をもとにして職業選択についてまとめた。職業選択における発達的变化についての先行研究により、18歳から22歳ごろにあたる大学生は職業選択における重要な時期にあることがわかった。また、実際に就職活動中の学生を対象とした調査では、現代の学生は職業選択に関して安定志向であるとされている。さらに、学部選択と職業選択の関連についての研究から、学部の性質によって職業的アイデンティティ確立の時期が異なることがわかった。これらの先行研究をもとに、大学生の職業選択においては無条件理想、条件付理想、実際の就職という3つの過程があると考えた。

第三章では、大学生を対象に実施した職業選択における理想と現実的制約についてのアンケート調査についてまとめている。一番はじめの理想の職業像が実現できなかったときの「理想の職業像への対応」と「理想の職業像の変え方」について重回帰分析を行い、仮説の検証をした。また、理想の職業像の変化に影響すると考えられる5つの現実的問題についても仮説を検証した。

第四章では、今回の調査で得られた結果をもとに、大学生の職業選択における理想と現実的制約について考察した。就職活動を進める上で大きな選択や決断を迫られる機会があり、重視したい条件もその都度変わっていくということが明らかになった。理想が変化したり、何かを妥協したりすることで、納得のいく職業選択ができるのだと考えられる。

## 目次

はじめに	1
<b>第一章 大学生の就職状況</b>	<b>2</b>
第一節 大学生の進路状況	2
第二節 就職活動の概要	2
(1) 民間企業における事務系の就職活動	
(2) 民間企業における技術系の就職活動	
(3) 公務員試験	
第三節 就職環境の変化	4
<b>第二章 職業選択に関する先行研究</b>	<b>5</b>
第一節 Ginzberg の発達理論	5
第二節 Super の職業的発達理論	6
第三節 学生の志向	7
(1) 企業イメージ	
(2) 重視する価値観	
(3) 会社選択のポイント	
第四節 職業的アイデンティティと学部選択の関連	9
第五節 職業選択における理想と現実	12
<b>第三章 大学生の職業選択に関する調査</b>	<b>14</b>
第一節 調査概要	14
第二節 仮説	15
第三節 分析上の変数	20
第四節 分析結果	23
(1) 分析 1 の重回帰分析結果	

(2) 分析 2 の重回帰分析結果

(3) 分析 3 の結果

**第四章 理想の職業像と現実的制約**.....

32

第一節 理想の職業像への対応.....32

第二節 理想の職業像の変え方.....33

第三節 現実的問題が理想の職業像に与える影響.....35

第四節 大学生の職業選択.....36

おわりに.....38

参考文献.....39

付録

調査票・単純集計